

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Nittayaporn Prompanya
論文題目	Creation of Modern Northern Thai Chronicles and Politics of Historiography (近代北タイ年代記の生成と歴史叙述をめぐる政治)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近代シヤム (タイ) の傑出した知識人であり官僚であったプラヤー・プラチャーキットコーラチャック (本名チェム、以下チェムと略記) (1864～1907年) の著作——「トン・タムナーン・ウタイ」(「ウタイ年代記の起源」) (1889～1890年)、『ワチラヤーン』誌に連載された4点の北部地方に関する年代記 (1898～1899年)、『ポンサーワダーン・ヨーノック』(『ヨーノック年代記』) (1907年) ——を主たる対象として、19世紀末から20世紀初めにおける歴史の構築と近代国家形成との関係と、20世紀初頭から後半にかけての歴史叙述をめぐる政治という課題を検討する。まずチェムがなぜ、いかに上記著作を執筆、刊行したのかを、チェム自身の体験を踏まえ、同時期に進行した英仏植民地勢力との領土をめぐる争いと国家統合に向けたシヤムの統治改革の文脈において考察し、これらの著作の特徴や意義を検討する。加えてチェムの死後、チェムの著作がいかに歴史研究者や北タイの知識人に受けとめられ、使われてきたのか、チェンマイを中心とする現代政治や社会的背景の中で検討する。</p> <p>第1章では、分析対象となるチェムの著作の概要を紹介する。そして、先行研究がチェムの主著として広く知られる『ポンサーワダーン・ヨーノック』(1907年)の検討にとどまる一方、本研究ではチェムの北部地方に関する初期の著作に遡り、それぞれの著作の成立の経緯と叙述の特徴を歴史の文脈に照らして分析する意義が説明される。また未公開アーカイブ史料を中心に、本論文が依拠した史料が紹介される。</p> <p>第2章では、全体の背景として、ランナーとして知られる北部地方の地理的条件と歴史を、主に標準的な教科書として知られるサラッサワディー・オーンサクン著 <i>History of Lan Na</i> に依拠しつつ説明する。これは4章以下で示されるチェムの著作の枠組みや叙述の特徴を考察する前提とも位置づけられる。</p> <p>第3章では、チェムの経歴と著作活動が、同時代のメコン上流域をめぐる英・仏・シヤム間の確執に関連づけつつ示される。英語を含む近代教育を受けたチェムは、1880年代半ばチェンマイに赴任して外国人 (イギリス臣民) との係争を扱う「外国裁判所」の業務に就いたのを皮切りに、英領ビルマとの境界域の探査などに従事した後、バンコクに戻り亡くなるまで司法界で活躍した。その傍ら『ワチラヤーン』誌に寄稿するなど執筆活動も行った。</p> <p>第4章では、最初の著作である「トン・タムナーン・ウタイ」の内容と叙述の特徴を</p>			

分析する。この著作は、英領ビルマとの境界域の探査中に執筆されたと考えられ、調査中に収集した現地の情報やイギリス植民地官僚の著作など多様な史料を利用し、紀元前中国やインド・中央アジアに始まり18世紀末に至る長期的時間軸とシャムを超える広範な地理的範囲の中で「ウタイ」（タイ）の人々の歴史を記した。また19世紀初めに書かれた北部地方の年代記と比較し、その叙述の特徴を指摘する。

続いて第5章では、「ポンサーワダーン・ラーオ・チェン」（「ラーオ・チェン年代記」）など、1898年から1899年にかけて『ワチラヤーン』誌上に連載された北部地方に関する年代記4点を、パークナム事件（1893年）に至るフランスとの紛争、および地方の中央集権化に向けたシャムの統治改革期（1892～1899年）という歴史的文脈において検討する。「トン・タムナーン・ウタイ」とも比較し、内容と特徴を考察する。

第6章では、プレーにおけるシャンの反乱（1902年）やフランスによるメコン川西岸地域のルアンパバーン旧領の領有（1904年）などの事件の後、1907年に出版されたチェムの主著『ポンサーワダーン・ヨーノック』を検討する。内容の確認をふまえて、4章、5章でとりあげた前作と比較し、新たな史料を以て18世紀末以降の内容の充実が図られたことを指摘する。

第7章では、かつて『ワチラヤーン』誌に掲載された「ポンサーワダーン・ラーオ・チェン」の復刻出版を検討する。1917年、タイ歴史学の父として広く知られるダムロン親王は、これを『プラチュム・ポンサーワダーン』（『史料集成』）第5部に収めて出版した。ダムロンの経歴と歴史叙述の特徴を概観した後、『ワチラヤーン』誌に掲載されたオリジナル版と比較し、英語を削除するなどダムロンによって改編されたことを指摘する。

第8章では、後世の知識人や研究者による『ポンサーワダーン・ヨーノック』の受容に着目する。1920年代後半以降ほとんど言及されなかったこの著作は、1950年代から興隆した北タイの知識人による文化社会運動の中で取り上げられるようになり、さらにラーンナー史に関する主要な教科書となり、今日も研究者の間で参照される様子が明らかにされる。

最後に第9章で以上の議論を要約する。1880年代末から1907年に執筆・刊行されたチェムの北部地方の歴史に関する著作が、それぞれの時期における北部地方をめぐる政治状況と呼応していたさまを整理し、また20世紀における『ポンサーワダーン・ヨーノック』に対する関心の変化を指摘する。そして、多様な史料を統合し、中国やインド・中央アジアにタイ系の人々のルーツを見出すなど、新たな歴史の枠組みを提示したチェムの先駆性を指摘してしめくくる。